

もてなしのまちの駅：よりよい情報発信源への試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小出, 奈摘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9323

もてなしのまちの駅

～よりよい情報発信源への試み～

小出奈摘

- 1 はじめに
- 2 まちの駅とは
- 3 「ゆいまちの駅」について
 - 3.1 発足の経緯
 - 3.2 特徴
 - 3.2.1 切符収集イベント
 - 3.2.2 傘の貸し出し
 - 3.3 現状
- 4 全国のまちの駅との比較
 - 4.1 活動に参加した経緯
 - 4.2 客層、仕事内容の変化
 - 4.3 駅長としての意識
- 5 考察：もてなしのまちの駅として
- 6 おわりに

1 はじめに

「まちの駅」とは一体何だろう。『由比町史補遺』で初めてその言葉を目にしたとき、私は疑問に思った。道の駅のようなものだろうか、具体的に何をしているのだろうか、由比だけでおこなわれている活動なのだろうか。他の人はまちの駅について聞いたことがあるかと思い、自分の友達に聞いてみたが、まちの駅のことを知っている人はいなかった。私は初めて耳にしたまちの駅という活動に興味を持ち、今回調査をしてみることにした。

『由比町史補遺』によると、由比のまちの駅は「まちを訪れる人達や、町民の方々に対して、(中略)おもてなしの心で接」と書かれている(由比町史編さん委員会 2008:181)。実際に由比を歩いていると、所々で「まちの駅」と書かれたのぼりが立っているのを見かける。のぼりを立てているのは、ほとんどが個人商店や飲食店だ。由比のまちの駅では、どのようなもてなしをしているのか。その活動が始まった目的や経緯、まちの駅の活動に参加している人々の話などを聞き、由比のまちの駅の過去、現在、そしてこれからについて考える。

2 まちの駅とは

まちの駅は由比のみにあるものではなく、全国の市町村でも活動している。2013（平成25）年3月31日時点で、まちの駅は全国54地域に1602箇所置かれており、静岡県内には、由比の他に富士市と焼津市にまちの駅ネットワークがある。まちの駅とは、無料で休憩できるまちの案内所である。まちの駅は市町村行政を越えた連携を目指し、地域住民や来訪者が求める地域情報を提供する機能を整え、人と人の出会いと交流を促進する空間施設となっている。また、まちづくりの拠点となり、まちとまちをつなぐ役割そのものでもある。人と人とをつなぐ場であるということから、ヒューマンステーションと呼ぶこともできる。まちの駅は主に既存施設を活用して設置することを想定しており、行政・民間を問わない設置・運営主体となっている。「まちの駅連絡協議会の概要」によると、まちの駅は1998（平成10）年に社会実験として始まった取り組みであり、2000（平成12）年にまちの駅連絡協議会事務局が正式に発足した。

まちの駅設置要綱には、まちの駅とは少なくとも以下の四つの機能を備えるものと記されている。

1. 誰でもトイレが利用でき、無料で休憩できる機能（休憩機能）
2. 「まちの案内人」が、地域の情報について丁寧に教える機能（案内機能）
3. 地域の人と来訪者の、出会いと交流のサポートをする機能（交流機能）
4. まちの駅間でネットワークし、もてなしの地域づくりをめざす機能（連携機能）

各まちの駅には、当該施設がまちの駅であることを示すのぼりが立っており、のぼりにはまちの駅のシンボルマークが入っている（写真1）。



写真1 まちの駅の前に立つのぼり（小出撮影）

まちの駅には地域住民・観光客を問わず誰でも気軽に立ち寄ることができ、訪れる人をもてなすまちの駅の運営者は駅長と呼ばれる¹。

3 「ゆいまちの駅」について

3.1 発足の経緯

ゆいまちの駅の活動の発端は、2006（平成 18）年に遡ることができる。まちの駅という活動を知った旧由比町役場の観光課が中心となり、2006 年から焼津での勉強会へ行ったり、由比の商店や飲食店に活動への加盟を呼びかけたりして、まちの駅の活動の準備を始めた。2007（平成 19）年から旧町役場の行政主導で、観光客をもてなすことを目的としたネットワーク名「ゆいまちの駅」の運営を開始した。しかし、2008（平成 20）年の由比町と静岡市の合併を機に、まちの駅の運営は行政から民間に移行された。民間主体の運営になってからは、原藤商店の原藤蔵氏が中心となって活動している。

2007 年の発足当時のまちの駅の数には 17 軒であり、そのうち 11 軒が現在も活動を続けている。そこへ途中から活動に参加した 4 軒を加え、由比には現在計 15 軒のまちの駅が存在する。

3.2 特徴

ゆいまちの駅に加盟しているのは、以下の 15 軒である（表 1）。

表 1 ゆいまちの駅一覧

歴史の駅	味と眺めの駅
かさいらずの駅	地域ブランド由比桜えびかくまつの駅
由比港 13 番地の駅	味覚の駅
まんじゅうの駅	桜えび直売ハラトウの駅
望月人形の駅	菊屋食の駅
やじきたの駅	玉鉾の駅
桜えび・しらす・おもろい夫婦の駅	大正ロマン BANK の前の駅
職人手作りの駅	

出典：ゆいまちの駅まっぷ

ゆいまちの駅は、由比で古くから家族や夫婦単位で経営をしている個人経営の商店や飲

¹ 本節の記述は、まちの駅公式ホームページと「まちの駅連絡協議会事務局 2008」にもとづいている。

食店、施設がほとんどである。ゆいまちの駅は、由比を訪れた人に地域の情報を発信しめてなすための活動であるため、西は JR 由比駅から 1.3 キロメートルほど離れた東倉沢区から、東は同じく駅から 1.8 キロメートルほどの距離にある由比区までと、すべて JR 由比駅から歩いて行ける範囲に置かれている。商店や飲食店が多く、15 軒中 13 軒が旧街道沿いにあり、2 軒は少し内側に入ったところにある（図 1）。これらのまちの駅は、地域の情報の提供、トイレの貸し出し、休憩所としての場の提供、そしてゆいまちの駅ならではの二つの特徴的な活動をしている。以下、それぞれの活動の詳細を紹介する。



ちの駅があった)の切符を集めて応募すると、抽選で買い物券が当たるというものであった。抽選は春と秋の2回だったが、現在はしていない。しかし、切符は現在も継続して販売している。切符は昔ながらの固い紙でできており、それぞれのまちの駅の名前が記されている。活動を始めた当初は切符を集めに来る人も多く、イベントの効果を感じたというまちの駅が多かったが、現在ではどのまちの駅でも切符はあまり売れていないということだった。

3.2.2 傘の貸し出し

二つ目の活動は、傘の貸し出しである。各まちの駅の駅長が集まり情報交換などをする駅長会で、何か困っていることはないかと話し合ったところ、突然雨が降ったときに傘を持っていないと困るという話が出たため、2010(平成22)年から傘の無料貸し出し活動を開始した。ゆいまちの駅でビニール傘を120本購入し、それぞれのまちの駅の前に数本ずつ置いている。突然の雨の際などに誰でも傘を使うことができ、借りた傘は借りた場所以外のまちの駅に返してもよいという写真3のような注意書きがあるので、最寄りのまちの駅に返すことができ便利である。地域住民も観光客も、どちらも利用するということがあった。

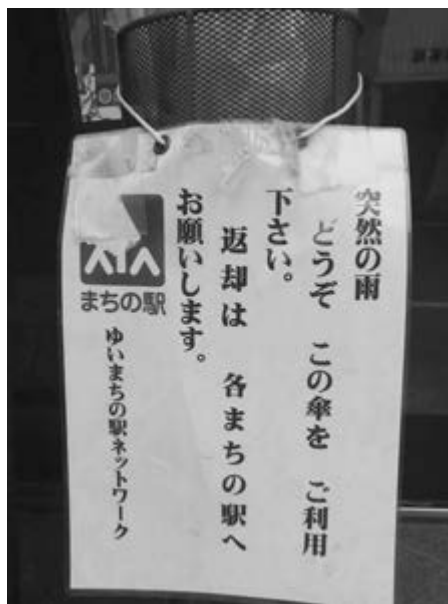


写真3 傘入りに掛けられた注意書き(小出撮影)

駅前のまちの駅では傘の利用はしばしばあるということだったが、一方旧街道沿いにはないまちの駅では傘の利用はこれまで全くなく、現在は傘の設置もしていないという駅もあった。

3.3 現状

今回の調査でわかったことは、ゆいまちの駅の現状はあまり芳しくないということだ。始めは官営だったまちの駅の運営主体は、合併を機に民間に変わった。そのためまちの駅としてのイベントの発案者が減少し、活動に関わる諸経費を全て自分たちで賄わなければならなくなったという。各まちの駅で配布されているまちの駅マップについても、かつては旧町役場が印刷していたがそれもできなくなってしまった。年会費を払う一方、まちの駅に加盟しているということが直接的に店の利益につながるというわけではないため、そのことからまちの駅の活動から脱退する店もあったという。

全国のまちの駅には、神社や寺などが参加していることもある。しかし、ゆいまちの駅には個人商店や飲食店が多く、15軒中14軒がそのような施設である。そのため、「桜えびまつり」や「浜の市」²などで人が多く集まるイベントの際にまちの駅として活動しようとしても、各店舗がそれぞれの仕事で忙しく手が空いている職がほとんど無く、そのようなタイミングでイベントを開催することは難しい。また、まちの駅という活動は全国的にも知名度があまり高くない。来訪者のほとんどはまちの駅という活動を知らないため、ゆいまちの駅で買い物をしたとしても、具体的にまちの駅がどのような機能を備えているのかを把握しないまま店を出てしまうことになるだろう。これは由比に限った話ではないが、まちの駅がどのようなものなのかさえ、来訪者には知られていないことが多いというのがまちの駅の現状である。

由比では現在、高齢化が進んでいる。駅長に高齢化が進む由比についての話を聞いたところ、すべての駅長が何らかの表現で「由比を活性化させたい」と回答した。先述のまちの駅に参加した理由について「地域活性化のため」と答えたまちの駅はもちろん、その他のまちの駅も地域活性化の思いを抱いているようだ。由比へ多くの人に来てもらい、町を元気にしたいという思いは皆同じであると、あるまちの駅の駅長は言っていた。ただ、地域を活性化させたいという気持ちはあるが、具体的な活動として自分たちから何か提案をすることは難しく、何かイベントがあればそれに協力するというスタンスでまちの駅の活動をしているという声もあった。まちの駅の活動に参加している商店や飲食店が所属する組織は、まちの駅だけではない。それぞれが商工会や組合など別の組織にも所属しているため、それらを蹴って普段からまちの駅の活動だけに専念することはできないと話す駅長もいた。現在由比全体で高齢化が進んでいるが、ゆいまちの駅の活動に加盟している商店や飲食店の経営者たちにも、高齢化が進んでいる。活性化のためには、若者の力が必要であると話す人もいた。新たなアイデアを募り、先陣を切って活動をしてくれる若い人が現れれば、由比としてももっと積極的に活性化に取り組めるだろうということだった。しかし、まちの駅の活動に若い力を呼び込もうとしても、まちの駅の活動が現在低迷中であることから新しい仲間を誘いづらくなっているという現実があるようだ。

² 「桜えびまつり」については大林の第12章、「浜の市」については長島の第4章を参照されたい。

4 全国のまちの駅との比較

今回のフィールドワークではゆいまちの駅の駅長 15 人に話を聞き、まちの駅の活動に参加した経緯、客層や仕事内容の変化、まちの駅になったことによる意識の変化、地域活性化に対する思いについて尋ねた。この節では、インタビューで得たデータに基づいて、ゆいまちの駅と全国のまちの駅とを比較してその違いについて記述する。

4.1 活動に参加した経緯

ゆいまちの駅の活動に参加したきっかけについて尋ねたところ、「旧町役場の役員に誘われて」と答えたのが 8 軒、「まちの駅の加盟店の人に誘われて」と答えたのが 4 軒、「広告などを見て自ら参加した」が 2 軒、担当者ではないため不明という回答が 1 軒だった。このように、由比では多くのまちの駅が、役員やまちの駅の参加者に誘われて活動に加わったという回答だったが、まちの駅の情報を得て自らの意志で積極的に参加したという回答も見られた。自ら参加したこれらのまちの駅は、いずれもゆいまちの駅発足当時から加盟していた駅ではなく、途中から加わったまちの駅である。

対照的に、全国のまちの駅の駅長を対象にアンケートをおこない集計した『『まちの駅・駅長さんアンケート』報告書』（京都大学経済研究所丸谷研究室・まちの駅ネットワークふくおか 2008）によると、全国のまちの駅では「自らの意志でまちの駅を始めた」と答えた軒数が 80 パーセントと圧倒的に多く、「役所や商工会、個人的な知り合いから頼まれて」と答えたのは 20 パーセントだった（図 2）。

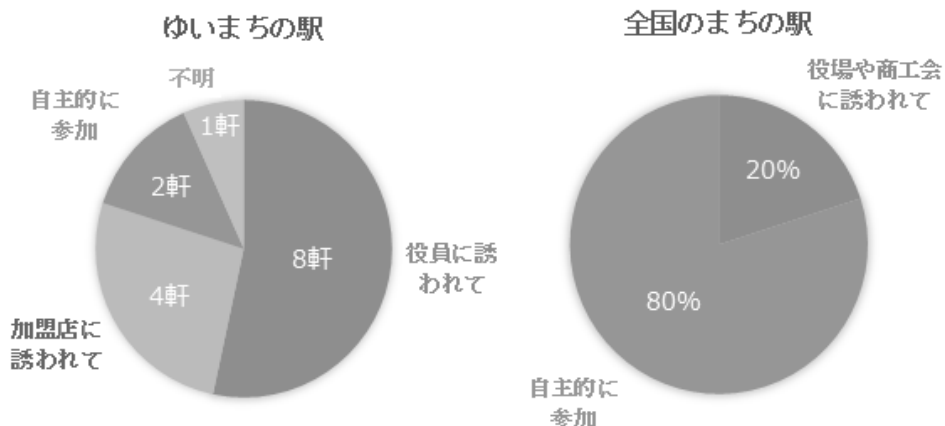


図 2 まちの駅の活動に参加したきっかけ
（『まちの駅・駅長さんアンケート』報告書を参考に小出作成）

また、ゆいまちの駅の活動に参加した理由については、「地域活性化のため」と答えたのが9軒、「店のPRをするため」と答えたのが3軒、「情報交換できるネットワークを持つため」、「組合の人に誘われ断る理由がなかったため」、不明という回答が1軒ずつだった。ゆいまちの駅はもともと地域活性化を目指して始めた活動であり、半数以上が個人としてもその目的を第一に捉えていたことがわかった。まちの駅の活動に自主的に参加した2軒は、それぞれ「店のPRをするため」「ネットワークを持つため」という回答をした。だが、まちの駅の活動は、トイレの貸し出しや地域情報を発信する場であるため、決して利益を生み出すものではない。当初は店のPRを目的として参加したまちの駅にとっては、その狙いが達成されたとは十分には言えないだろう。店の宣伝をするには、まちの駅に頼るのではなく自分たちで個人的にインターネットなどを使って情報発信をしなければならないと話す駅長もいた。

一方全国のまちの駅では、まちの駅を始めた理由として「地域全体の集客や魅力向上に貢献したかったから」という回答が最も多い反面、「自分の店舗等の売上や集客の増につながると思ったから」という回答が2番目に多かった（複数回答可）。由比も全国のまちの駅の傾向と同じように、駅長たちが様々な狙いをもってまちの駅の活動を始めたということがわかった。

4.2 客層、仕事内容の変化

まちの駅になったことによって、目に見えるわかりやすい変化はあったのだろうか。それぞれのまちの駅で客層や仕事内容に変化があったかどうか尋ねたところ、由比ではすべてのまちの駅が「ほとんど、あるいは全く変化は無い」という回答だった。しかし、まちの駅ののぼりや看板が多少の目安にはなっているのではないかと考える駅長もいた。先述したとおり、まちの駅は利益を生み出す活動ではなく、全国的な知名度も高くない。駅長によると、由比を訪れた人がまちの駅だからと店に入ってくることはほとんどないという話だった。

『まちの駅・駅長さんアンケート』報告書』の中で類似するアンケート結果を参照すると、全国のまちの駅では、まちの駅になったことによる変化について売上は「ほとんど変化なし」という回答が82パーセント、「少し増えた」が15パーセントとなっている。来客数については、「ほとんど変化なし」という答えが72パーセント、「少し増えた」が23パーセントである。売上や来客数が増えたと答えるまちの駅はあるが、ほとんど変化がないという答えが4分の3ほどを占めており、まちの駅になったことによる変化は特にないという結果が全国的にも大半であるようだ。

4.3 駅長としての意識

次に、まちの駅になったことにより、目に見えない心理的な変化があったかどうかを尋ねた。心理的な変化とは駅長の意識の変化であり、意識の変化とは、例をあげると「もてなしの心をもって接客しようと思うようになった」「地域活性化に積極的に協力しようと思い始めた」などである。全国のまちの駅のアンケートでは、「まちの駅になったことにより、地域への来訪者を大切にするようになった」「地元の人々との交流や連携の意識が高まった」という項目に対し、かなり、あるいは少し積極的になったと回答した駅長が共に 65 パーセント以上おり、観光客への対応やまちづくりへの思いなど、駅長の意識に変化が生じるという特徴が見られた。

しかし、ゆいまちの駅では「意識の変化があった」と駅長が答えたのは 15 軒中 4 軒のみであった。だが、これは由比におけるまちの駅がもてなしの心を持っていなかったり、地域活性化に対する思いが無かったりというわけではない。ゆいまちの駅を運営する商店や飲食店では、まちの駅として活動する以前からもてなしの心を持ち地域の情報発信をしていたため、まちの駅になったからといって大きな意識の変化は無く、このような結果になったと考えられる。まちの駅の人話を聞くと、「以前から由比の観光パンフレットを置いていた」「地元の情報について聞かれれば答えていた」という駅長が多かった。一方、意識の変化があったと答えた駅長たちは、「時間があるときにはまちの駅を訪れた観光客にお茶を出したり話をしたりして、おもてなしの心を持つようになった」「トイレの貸し出しをおこなうようになった」などの具体的な変化があったということだった。

5 考察：もてなしのまちの駅として

ここまでゆいまちの駅の現状や駅長が直面する問題などの事例を提示してきた。本節では、それらの事例を元に考察を展開し、最後にゆいまちの駅の事態の好転に向けた自分なりの提案をする。

第 3 節で述べた通り、ゆいまちの駅は、西は東倉沢区から東は由比区まで、すべて JR 由比駅から徒歩で回れる位置に置かれている。まちの駅は観光客に向けた活動であることから、この範囲が旧由比町役場の観光課が考えた、来訪者に対する「由比」の範囲であり、また来訪者にとっての「由比」の範囲となっていることがうかがえた。

同節で取り上げた切符収集イベントでは、まちの駅の人話によると、抽選のためではなくコレクションとしてまちの駅切符を集めていた人もいたそうだ。ゆいまちの駅でおこなわれている特徴的な活動として取り上げたこの切符収集イベントでは、由比を訪れた観光客に由比の町を歩き、多くのまちの駅を巡ってもらうという当初の目的は果たしていたように思える。このことから、切符収集イベントを始めた当初は、まちの駅の活動が地域活性

化に貢献していたと言えるだろう。しかし、このイベントが始まって7年経ち、地域の人にとっても由比を訪れる人にとってもマンネリ化してしまった現在、新たな活動が求められているように感じた。

二つ目に取り上げた傘の貸し出しについては、駅前のまちの駅では傘の利用はしばしばある一方、駅前の道路沿いにはないまちの駅では傘の利用はなく、傘の利用の頻度は、まちの駅の場所によって差があるようだった。かつては駅でも傘の貸し出しがされていたようだが、現在はおこなわれていない。その代わりにまちの駅で傘が貸し出されることで、突然の雨に傘がなくて困っている人の役に立つだろう。まちの駅が多く置かれている JR 由比駅周辺には、すぐに傘を買えるコンビニが無い。この傘の貸し出し活動から「雨のときでも観光客をもてなそう」というまちの駅の思いをうかがうことができ、この活動は由比を訪れる人にもっと広く認知されるべきだと考える。

また、ゆいまちの駅と全国のまちの駅を比較してみてわかったことがある。各まちの駅がまちの駅の活動に参加したきっかけについて、全国に比べ由比では「旧町役場の職員に誘われて」という回答がかなり多くなっている。このことから、ゆいまちの駅の活動については発案者である旧由比町役場や関係者が、商店や飲食店、施設に積極的に声掛けをしていたということがわかった。旧町役場でゆいまちの駅の活動を始めたころに声をかけた店などは、ほとんどの店が参加したという話や、まちの駅を始めるにあたって特に障害なども無かったという話から、由比ではまちの駅がスムーズに受け入れられたようだった。しかし、まちの駅の活動に参加していたものの途中でやめてしまった駅もあることから、「まちの駅」という活動が実際にどのようなものであるのかという認識が、各々のまちの駅まで浸透していなかった可能性があったのではないかと考えられる。ゆいまちの駅の活動に自主的に参加した 2 軒が、それぞれその目的を店の宣伝や情報交換のためのネットワークが必要だったからと回答したことからも、当初のゆいまちの駅の「由比の町を活性化させる」という目的が浸透していなかった可能性があると考えられる。ゆいまちの駅では、すべての駅がまちの駅になったことによる客層や仕事内容の変化は無いと答え、これは全国のまちの駅の傾向と似たものである。まちの駅になることが、直接店の利益につながるということはないということが確認できた。しかし、全国のまちの駅で見られた駅長の意識の変化はゆいまちの駅ではあまり見られなかった。これは、ゆいまちの駅ではまちの駅になる以前から地域の情報発信やトイレの貸し出しなどをおこなっていたため、まちの駅になったからといって特別な変化は無かったという理由である。それぞれの商店や飲食店がそれまでおこなっていた活動に、まちの駅という名称がついたという印象を受けた。

ゆいまちの駅の活動が最近では下火になってきているのは、合併を機に運営主体が行政から民間に移ったため、まちの駅の運営を専門に担当できる役職がいなくなったことが一因として挙げられるだろう。また、ゆいまちの駅には商店や飲食店が多く、由比全体に人が多く集まる際は、どのまちの駅もそれぞれの仕事で忙しいため、まちの駅としての活動ができないという理由も挙げられる。それに加えてまちの駅の知名度が全国的に低く、これらの

状況がゆいまちの駅の活動の停滞を招いていると考えられる。

湖中真哉は、静岡県静岡市清水の商店街において、コミュニティの再構築を目指して導入された地域通貨 EGG があまり活発に使用されていない理由について、以下のように述べている。「地域通貨が導入される以前から、そもそも相互扶助関係は、極めて活発であった」、「既に親密な関係性の紐帯のなかで生活している住民にとっては、コミュニティの再構築を目指して導入された地域通貨 EGG の意義は、かえって理解しにくかったと思われる」(湖中 2005: 43)。つまり、既に存在している関係性があるコミュニティの再構築をもたらしとする地域通貨は、そもそも根付く余地が無かったということである。これはゆいまちの駅でも同じことが言えるのではないだろうか。ゆいまちの駅では、運営している商店や飲食店から、まちの駅として活動する以前からもてなしの心を持ち地域の情報発信をしていたという回答を多く得た。由比では既にまちの駅と同じような活動をしていたために、改めてまちの駅としてシステム化することは難しく、活動の停滞を招いたのではないだろうか。

今回のフィールドワークでゆいまちの駅を巡って感じたことは、どのまちの駅の駅長も心をこめたもてなしを心掛けていているということである。突然訪問した私にも時間を割き、様々な話を聞かせてくれた。それはまちの駅に関する話だけではなく、由比の歴史や特産物、漁の様子から、最近のニュースや身内の話にいたるまで、「店員と客」という関係ではなく「人と人」という関係で話をしてくれるまちの駅が多かった。まちの駅の活動に参加しているからには、由比についての話を聞かせてくれるのはもちろん、それ以上に、温かい心で由比を訪れた相手を迎えるというもてなしの心を持っているのだと感じた。

ある駅長は、「由比には『通過者』が多い」と話していた。由比を訪れる人の中には、由比が最終目的地になっているわけではなく、東海道を歩いていたり、箱根に向かう途中で昼食を取るために立ち寄ったりする人も多いようだ。フィールドワーク中も、由比のまちを歩いていると大荷物を背負いウォーキングをしている中高年層の人々を何人も見かけ、定食屋では実際に東海道を歩いているという男性に出会った。このような人々は、あまり時間にとらわれず、町並みや人との触れ合いを楽しんでいるというような印象を受けた。彼らにとって、まちの駅の果たす役割は大きいだろう。地元の人だからこそ伝えられる情報を発信し、もてなしの心で温かく迎える。時にはお茶を出して、雑談に付き合う。そのような地元の人との心の触れ合いを求める旅行者も、少なからずいるはずだ。その舞台として、もてなしの場であるまちの駅が利用できるのではないだろうか。

ゆいまちの駅がおこなっているこのようなもてなしの活動は、まちの駅になったからといって突然始まったものばかりではなく、地元の情報の提供など、以前からの活動の延長線上にあるものも多い。駅長たちにも、まちの駅になったことによる意識の変化もそれほど見られなかった。そのため私は、由比のまちの駅は必ずしもまちの駅の看板を掲げる必要は無いかもしれないと感じた。しかし、対外的にもてなしの活動を知ってもらうためにまちの駅を活用することもできるのではないだろうか。たとえば、のぼりを立てまちの駅であることを示すことは、地域の情報発信の拠点であることをわかりやすく示す手段となり、観光客の

中には「訪れてみよう」と思う人もいるだろう。地元ならではの情報を知りたい、地元の人と交流をしたいと思っている人にとっては、やはりまちの駅であることを示すことは大切である。

しかし、第3節でも述べたように、まちの駅の活動はあまり全国的に知られていない。まちの駅ののぼりを見ただけでは、地元の情報発信をしていたりトイレを借りたりできるということはわからないだろう。そのため、ゆいまちの駅の活動をこれまで以上にアピールしていく必要があると感じた。ゆいまちの駅の強みは、やはり駅長たちの温かいもてなしの心である。それをインターネットやSNSを通してアピールをすれば知名度も上がり、まちの駅であるということを知って来訪する客も増えるのではないだろうか。柳田義継は、横浜市の大口通商店街でおこなわれたwebサイトやTwitter、Facebookによる商店街活性化の事例を元に、ソーシャルメディアについて以下のように述べている。「誰もが使いやすいという『簡便性』」、「お気に入り登録した情報が自動的に自分のページに流れてくるため、自分で情報を見に行く必要が無いという『プッシュ性』」、「情報を即座に入手できる『リアルタイム性』」、「コミュニケーションがしやすく様々な情報が広範囲に伝わる『伝播性』」は、ソーシャルメディアの大きな利点である（柳田 2013: 69-70）。

現在、全国のまちの駅全体のFacebookやTwitterのアカウントは存在している。そこでさらにゆいまちの駅の情報に特化したそれらのSNSのアカウントを作成し、情報発信や交流をすることで、ゆいまちの駅の活動が広く認知され、活性化につながるのではないだろうかと考える。しかし、柳田はWeb活用の課題として、担当者への負担による継続の困難を挙げている（柳田 2013: 76）。ゆいまちの駅は民営の活動であり、まちの駅を専門に活動できる人は居ない。由比でもやはりそれが課題となるであろうことは、考慮に入れておくべきことかもしれない。

また、切符収集イベントに関しては、スタンプラリーや夏休み限定の子供向けイベントに改変してみるなど、今までであったものを少し変えるだけでも新たな刺激になるのではないだろうかと考える。ゆいまちの駅の加盟軒数は15軒であり、その規模は全国のまちの駅と比較しても、大きすぎることも小さすぎることも無い。何かイベントをするにはちょうど良い規模であると考ええる。ゆいまちの駅という基盤はすでに存在する。これから由比でイベントが催される際は、まちの駅の組織が利用できるだろう。

由比を訪れた人に由比についての情報を提供し、もてなしの心で対応する。これらのゆいまちの駅の活動が広まれば、よりよい地域の情報発信源になるだろう。

6 おわりに

ゆいまちの駅でのもてなしは、観光客に対し地域の情報を発信し、時には彼らとゆっくり話をし、客としてではなく人として温かく迎えるということであると考えられる。私が強く感じたのは、これらのもてなしが、まちの駅を運営する人々の人柄から生じるものである

ということだ。ゆいまちの駅が始まったきっかけとして、地域活性化という大義はあるが、実際に話を聞いてみると人と話をすることが好きな駅長が多いのだということがわかった。ほとんどが突然の訪問だったにも関わらず、全てのまちの駅の方に話を聞くことができ、私が順調に調査をすることができたのも、ひとえに駅長たちの優しさや心温かさのおかげであると感じている。

由比には桜えびや旧東海道など、観光資源となるものが存在する。それらを求めて由比を訪れた人を温かい心で迎え入れ、交流をする。それは、実際に由比を訪れたからこそできるものであり、インターネットなどではできない生身の体験である。地元の人との触れ合いを求める観光客にとっては、まちの駅は旅先での出会いを生み出せる良い拠点になるのではないだろうか。

謝辞

今回のフィールドワークでは、多くの人々にご協力をしていただきました。お話を聞かせていただいた方、貴重な資料を提供してくださった方、そして温かく私を迎えてくださった方々に、厚く御礼申し上げます。

参考文献

京都大学経済研究所丸谷研究室・まちの駅ネットワークふくおか

- 2008 「『まちの駅・駅長さんアンケート』報告書」京都大学経済研究所丸谷研究室・まちの駅ネットワークふくおか。

湖中真哉

- 2005 「地域通貨はなぜ使われないか——静岡県清水駅前銀座商店街の事例」『国際関係・比較文化研究』3（2）：33-58。

まちの駅連絡協議会

- 2015a 「まちの駅とは | まちの駅」まちの駅公式ホームページ
(2015年7月6日取得、<http://www.machinoeki.com/about/>)。
- 2015b 「まちの駅設置要綱 | まちの駅」まちの駅公式ホームページ
(2015年7月6日取得、<http://www.machinoeki.com/eki/points/>)。

まちの駅連絡協議会事務局

- 2008 「まちの駅連絡協議会の概要」まちの駅連絡協議会。

柳田義継

- 2013 「Webを活用した商店街活性化」地域デザイン学会『地域デザイン戦略総論』芙蓉書房、65-77。

由比町史編さん委員会

2008 『由比町史補遺』 静岡県由比町教育委員会。